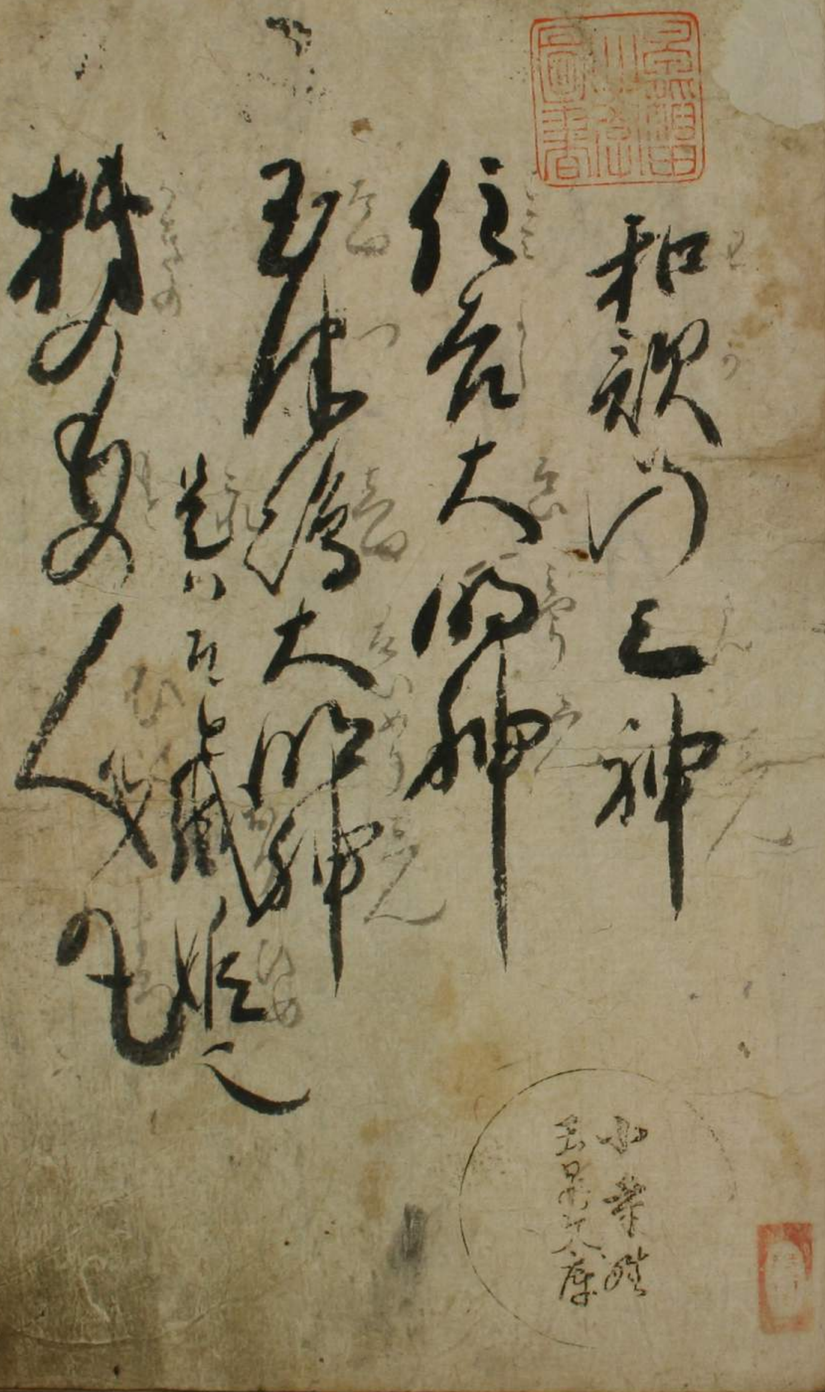
伊勢物語

上

特
ハ利12
2868
1

門へ12
號2808
老1



世ゝに於てこうゐかうみわしてなほ
京のほとりの里よりしほの一きて手わて
いとをわうよりさとにいでなる面めいうる女
ゝ兄弟かゝすゝをわこうよりおとこかいにて
ゝ心わおもやしびあうはと有ゝとりた
ゝてゝ有りければ神ばん神まびてりけれ
男のきうわけ歌うわきぬ乃ほうをわ屋
うう我うめてゝ屋ううよりおとこ志乃ゝ
濃かわきぬをなむきうるけ歌。

かはうひくけりの郡さ乃すわ社
志乃ふ社乃ぐ神ぐわ神ぐ
と女歌をいたきていひやるけゝ
おゝ神ほたすどるやおひけん

みちゆくの悲しぶもちすわ立ゆ〻ふ
見ぐるまうめのーわまふらなくよ
ぞいふうらみんぐるへなわせう人そかく
いちやきうやびをなんーく彩
まのーたくあわけわなら乃京いはふ
祇園の京ハ人乃いろまさ夫はうさわ
ぞ彩時に西落京有ー世おわくわうよ
世人てハきうきまうくわうの人かゝら
よわは心なまはさうまうわくあ乃ぞ

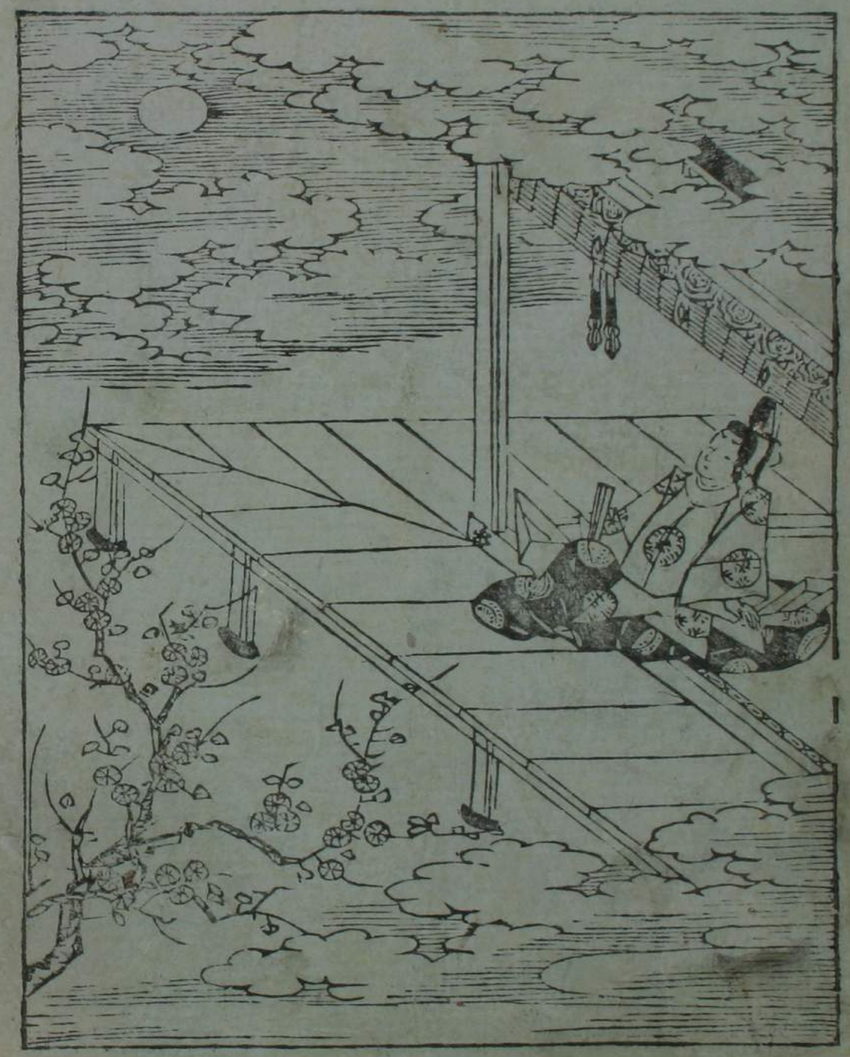
もゝのさかりしうれをかの
ぞらもあはかるひをかつわ きてこいかゞ
おとひとん時りやまひのほいとち面ぞを
ゆうすりやまをるる
おもをもをてまを我四きてを
春のもりとそなのめくゝ法

世ゝにおとこ・をんなわけはうゝ
のもとにかしきもとゝいふ物をやるとて
思ひあまりはむぐゝの雨ふる袖をしぼるなん
ひゞきとのまえうぐをさはぐゝも
二条藤きさ花乃はなさかりもつかう
きわ殆りてゝ人まてゝおりゝ
とたのしゝなわ

むの一京の五条有 花屋さいけ宮方
り 海 八数すの乃ゑつるはむ日と所わ
乃里うまをほいて有そあてて心さしぬ
かく里ゑう人り と梅屋ひくる坂む月の
十日りつわ院ゑと小ほりにかく神なりわ
ゑわ所ハきけとく人屋ゑきかゑへ家 とこ所
まゑあうさわ乃神ハなを ゑ一やたゑひ
ひく なんゑわ乃院みのと一乃む月小梅
乃義さうりすこうをこひていさてうら

てて見ゆ見これとこうゑ小乃りる見くも
ゑくびうと所よてあさうな所ゑりさ一
きて一月のかくさゑくまを屋ゑ新りてこうを
ゑもひいくくよゑ所

月やあくあぬをやむ一のはる春ぬ
我月日ゑ院ハゑと乃乃ゑ一て
やこ見で夜の院乃くくとあく所有
なくくかへわゑ乃



前にとゝ所わりなわほんの一ぶを糸をまわ
りいれ一のひをきゆこうふら
ゝとゝろまれいかとらちるえいてをしハ
へ乃ゝ所たつついひちりくはきうわ
かまひりわ人志けとものねとひうき
かわりなれハあ一きつけてうおうひ
ちよ袖ことに人をまてこまゆせりれを
けゆもえ所りてうありわさゝようは
人志まぬかすひちのせきゆわハ

よんくらいたうもねなるん
ぢとまるのなかへ
ものといたうこゝろやこけ
ものなりゆるしてくれわこゝろよきたは
ーーのひてまいりわくるぶぜのきこゝあり
くれ神八郎うとだちのまゝせたまひけ
ぶとう

着物をこゝかゝりをんなのえうまゞ
かゝりくゝ城年をつゝよびもとゝ
をうゝうゝてぬひあてゝいとくゝたる
りわあくたゝのとゝかゝを外ゝいきくる
ごくゝのうゝ有をきたゝ風霜城かゞ
いなふうとなんかゝきこ有とひりゝ
うゝたおほくゝ強まゝ神人あたゝ有る所
ともゝこゝてゝ人さゝいゝこゝうなゝ
面も伊ゝう山わりくゝ世風くゝに

女をなかくゝ城ゝいゝておとこゆゝや
ふくゝひ城おひてとゝくゝもこ有をわたゝや衆
もあけなんゝとかもひはゝゝゝ里くゝ数に
おにゝやはゝくゝらゝまゝひてゝりわあゝやと
いひけゝと神ふ風さゝきょえおゝのさゝわ
りゝ里やゝくゝ強まゝなけゆゝく有みゝきい
井てゝこゝ志をんなもゝおゝ世わを
ゝゝてふけゝと我ゝうひゝ
志ゝ恋ゝりなゝたゝうゝと人のとひゝとた

家のこうふへてきえふ海しゐ丸を
こゝ神ハ二家のたもきまれいやこゝのめ法のは
もゝにはかうまつほやうこゝる殆つわけ
法をうたちゐ以ゆめてたくかきゑれ神ハ
ぬすゐてたひていてこゝわゝ法を法ゑう
と四わかはのおゆこゝた殆うく有つ孫の
大沙ゼウ海ぶ下らうこゝ内へまいり殆ふま
いみどうゐくひとゆるをきつけてとく
こゝこゝわか海したまうてゐりこれ城かく

わたとハいつのやけわ海ゐいゆわかうて
殆をまれこゝ有りおつゐ殆と家の殆や

世〻一男あり家わ京有　なを里ひて
ゆたまに川ぢ久ぶよ　の勢ぶ玉のあそひ
ぢうみはしをゆくにな　ぬ乃川中　志ぶ
つを見て

川ゆく志ぶくるしの恋　きふ
うゝや海　しゝるか　ぶ　なゝう那
となんよめわ久ぶ

昔たゝこあわらわ京やゆえうかわれん
ゆえまゝ乃かゝふゆゑよてはこゝ所をもとむとゝ
とゝ申ゆゑ人ゝ申わ此こうしておきまも
きふのくゝたはきまれ所りけわ
北たち城乃そ
きふのなりあさは乃たけよ所煙
きちこち人家こうや乃そとゝ見ぬ

育男のをりうは拙男なれうなきゆゑ
ありて家よりまうさせたかさにはせ
給ふくにもとめにとゆゑはわもとら
ともせはうの人わらわ毎たわさていさ仏星
みち志まほひともはくまとふ巳仏わ
見かはのくまやはりといふ所小りうわ
ぬうこ城やはは男といひ仏新を小行はれ
くもてを前をを志ををつをたせはよらわ
てををやはりとはいひ仏新うよさハのか

とわれぬ水はうけにおわのへうきつひくひ
雪のうへさいはかきけたれたりとかまし海
くさたるあうれをくそあり人のつくくう
きけいたといふつゆ一枝くのうえにす
庵てさひのいをしよめとひりれ秋ふるる
かゝ衣きけゝあれす一つまさきはい
さ雪くきぬるうゑ物一枝ふ
ひゝうありりれたこれ人かきひのうんふ
像れをしてあどひ有雪あり

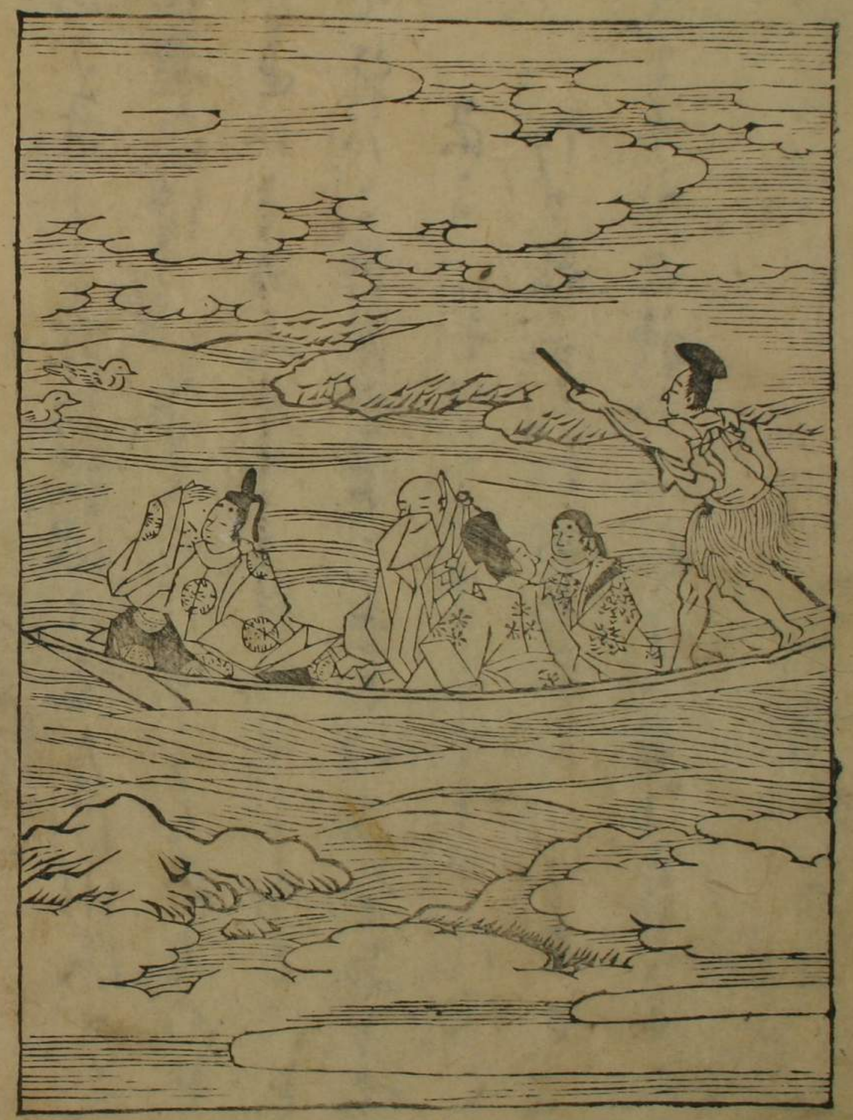
ゆめくてはるかのくにいまぬう清乃
山ふかうりて力の川人とするこゝ北は川
てくうほうきにつたかゑていさりわ器
心なくすくろなゆめを見ることゝ思ふ
ふと行者ひたわかふこちいそかい川まま
ものとゝいをみきいつ人なわりわ京
にうけ人家はもくにくゝかきくゝ清く
はるかなうけ乃山のうてりも
笑るもひとにあきぬなわりわ

ふしの山をみまいさ有乃つこもわふ
雪はゝ〳〵ろうふまり

とをたゝぬ山い王の神りつとそか
あのこまゝ雲法あうしん
うは山いゝゝまたとゝ住ひえはや海城す
たちりわうをれあけも雲んをとしてなわ
をゝ〳〵かゝちの原うになんあわ川歌

秋ゆめくてせきーのくたとさもつぬさ
みくさとのふうにいせやかほきさ河ぬち
うれをいただいとつふうぬりのあと里ふ
むまめくたもひやまばゑわなくうと秋く
もきまきかふかひあつ所まるさーも
里りやふ祢月はもく秋ぬといつる
乃わてわたうんとけくううこれひと物を
ひくて京に思つ人なきみーもあうん
さうおわーもさ秋きるのん志とあーと

ゆうきーーたおかほきさ所水流うへよ
所秋ひゆくいをしくふ京まみえぬとわ
なまいうん人見志ゑうどわさーもわにとひ
々秋ハこ秋なせ宮ことるといふをあくて
所ふーおりくいきことりん言こる
ものゑふ人ハあわ所ふーやと
ゑるもわ久秋ハふ



音がとこせきこゝ陸國まてまゝひはをた
ゝりさてうはくに〻ゆるめをよゞひをわ
ゝ〻ひこと人有あをきをとひをゆ
そゝなの人あてなくをとりんつけす
ゝ〻ちゝハをを人ゝてそゝなひちゝう
ゐわけをさてなせあてゐゝハふとかもひ
ゐゝこのむこかの有りようをこせゐ
ゐ教はむ所なんいはまれこゐをみよ
ゐゝ所となわゝ彩

みうしのくたれむのかわもひたふに
ぬれかさうちとなるぶ
せこうねかんし
我かこにうるとはくなりこうしき
たのむのうりをいつかわすれん
とかなん人ぞくにてもかをかくぶ事
なのんやあさわ事
むりにたくこ所まんゆえ所有
いそもともにうちわりのおこせ事

わすれはよかとは云ねになわぬとも
ちらり身のめくわふまて
若かくこあり人乃せすをぬ所見て
せくこ野へゆくかとよぬす人なわ
り祇ハくよのうへにうめ羅神有岩わ
女城をくをむ所中有をきてにけ
こりわこちくる人こ乃野いぬ日とあ
なわとて火ぢりんと決をんをわひて
世野をりよいあやきうわくきの

はまもこまもあり木のめこの神風
とゝろく風城きて
のてつかりけり

[illegible]と京のみやのまに
きこゆまじんはうしまいくるとと
かきてうはきまむさあんとうよて
をこ[illegible]のちをとまきんなわよりまん京
しわをんみ
[illegible]あさきさんたうにてたのむまを
とはぬもつしとぬもうはさし
[illegible]をそなんへうたれ[illegible]志りま
とへいふとハ[illegible]あんう[illegible]あんん

かふおわるや人ハしぬん
せり男みちのくにすろ有り
いたにりうこ所女京の人ハめ
かうやおそりせ都ちりなも所心
なんあわりまさてかのをんふ
中くに恋よりふあを寄よりて
なふへりりりもをりりわ
うさんうひまひうわりりさはりあ
まとやおひりんいきてねよあわ安よ

かくしてすりかたを女
衆もゆハきつふさめあそくるうけの
まるきたなきてせをやりける
とべへ成よおとこ京へ行雖まうけとて
くわりうのあきを乃松法人あるは
言こゝ法とたゝきとゝ海しを
使ひつかはしまろこかひて思ひたり
とうひをわれ乳

者みちのくにてふてうことなき人のめ
よかすひの新月あやーうさやうまて
ゆく末ともすゝけみえわたる
志のふ山思ひくらふ人もの郎
人のうゝろのおしはかるも況て
如何ゆくゝうてたしーと思へとはかを
う那きえひを心地ぞをいてはをせハ
すゝ記乃ありつゝ孫といつゝひとあわりり
みよのこかとたはかうまわてとたり

あひ乃祇とのちハ世かえわ時う一わ可
乃れをよはつゝの人乃ことも祇ゝ人かゝ
を心うたゝしくあるてはのなかこと祇こ
のぞてことう人ともにも世ゝ者ゝ
をせゝよかわしー時のんあかゝよの
つゝのこゝもゝ寸ゝ中ゝころあひた祇
うかめやあゝくとこえなゝてつぬ可
あまるふわてあゝのさたゝてなわうかる
所へ乃をおとゝ海とりむはまー

きのふこそふりにしかと今はとゆく秋の
あとをとゝ思ふ人をもまたしらぬ
ものゝふかわらわかもひるひて秋人こゝ
ろあひかゝるひとゝもたちのもとに
かうくゝいまをとて西うりをなりこと
もいきこかなくこしとも元勢たうハすこ
とくかきておくた
て秋おわてあひみしことをのうふまた
ひたとゝひはゝよたハへ有りわ

かのとゝもびちこまをゝたゝいとあくまと
ものてゝくゝのもれまをくわてらめる
年さまもと秋とてらたりくへよりをを
いくたひきこをたのみあ屋人
かくいひやわれまを
こ秋屋こ秋あまれを衣むこ
天のみくゝしとたてまつわれ秋
よろこひてたへてみ
秋やくつまあふとかもまて

あるはなこたの名うてあわれ新
中しこ海をとはきさわぐろ人宿さく〜
乃はかわ小兄有しきたわれ神八ゆす
あさなわと品にこうえ仏さく〜花
とし〜ままきあ人もまちりわ
遊

りよこ寸八あ中雲とうあ小海
きえ仏をあわともち仏と兄まや
世す〜なあ小ゆる女あり仏り男ちかうを

家わ女うたよむ日とあわれ神八こう海
兄んとて北くの屋乃うゆ乃へ成水
里ておとこ乃ものへ屋
くまな井にしよほハいて〜百雲宿
えたもとをて有ものも兄仏
おとこ〜仏よこよ兄れ歌
江有にほふかうんの〜〜富ハ
おわれる人乃そうやもみ遊

むかし男こゝやはらうへに歌ものがたりふこ
うちなわりに歌人伝あひき里たちわれ所おと
もなくこゝろきにしわおもふ一所をわれハ如落
めりりを見ゆる掛うたとこハ何ものもの
かともおもひさらしをんな
何ものゝものようもの人乃なわゆくか
さきう有めるをみ遊るもの
ゆるようわに神ハたとこ丑——
あ海雲のよう多に乃をさで丑ことは

ものゝ山のかせぐやこなり
とゝめわけるをみ物こゝあ人となん
いひける歌
世ゝ男やまとたけあり女をえてよりひて
ひに家わさてへて家ほかんする人
なわ山祇ハかゝるうちにやよひいるあ
りかえてのもみちの山をおもしろ歌
あわて女乃もとにこちらいひ取る
君かゝめたお祇えたをる歌なり

かくこう祇乃もこうち――よけき
とてやをたわ山祇ハ西事ハ京にて伊き
てなんもてさ物をる歌
法のまおうを詞ふい法法あ法
きをうちとまハをなる所し

有男女いふ〳〵こくはひかつてこと
心なかわりわさる故伊うなる所こそかわり
れんりきしかあるこゝろつけてよのなか
をウのゝと思ていぞ〳〵りんなんにさるてかほ
うゝ我なせうかんてもあれよりきつけりあ
いぞ〳〵いるばんうゝ志とりひやを食
世のあわ山海を人ハ〳〵禄は
とうゝ見をきていて〳〵りよりわうの女かく
よをたゝ我けしうりんをくへ家うと

たゝぬを聞りこゝろわてうかゝんと
いやしいうなよていほうたりもとゝ世世
かんとかをまいてゝとみかう見くらき
といつこをりうわとゝ後世ほえさわらぬ秋人
かつあいりて
なふひなよ世なわりとゝ身後
ぎりちあわてゝまやゝ海し
世ひてなりめをまわ
人ハ伊きなひを寸ん玉まりて

なりけりこゝろみえけゝ
こゝ乃如世ゝ逢くあわてねむ一ひて
ゝやなわれむ以ひをこせたゝ
今ハとてわいらくきのゝ祢をるふ
露心有ハ海うをひもう那
ゝ

われくそうよとゝはきく物なゝハ
なひ乃わとゝ世きわゝ海一
みくあり一ゝわれよ以ひかりて男

わかれの庭んと思ふ心のうたがひ可
あわ―らわけに拙うかゝ―れ

ふう雲月ノたちのゐる雲れ所とも
月のえの眼とてもなわよ所うれ
とハいひ乃れと我儘か遊ゝ可あわ可
乃まハうとゝなわにりわ
着れ水眼ゝたえ可乃風ふうなをやを
ひまさゝわ乃世女のもとゝあを

ゞ紀ふう人をはえ志もわれ乃祢ハ
うたうみはゝれ和ゝ
世眼ゝわれたまいよといひてたと
あひ乃ゝハいひとつをのはまれ
ねのなのまゝたゝ―とう思ふ
とハいひ乃まやうは和ゝ可わいる
志へ乃ゝ紀儘こゝもなと乃ひて
秋の和乃ちゝ我ひとよあらゝゝ
やちゝれゝやあくときのあゝん

みー

なよやよのちゝを一枕にはせわかも
しとゝろうわてとわ風なよなむ
いろみ〜へらわもめ寄を有てなん
かすひ寄事

青ゐなりわさ屋ひしの久保人のことの外
乃もとにいとゝあうひけうはおとはり
なわふりはをかとゝも女もはちのりて
なるとりゆくわとこをこはは女をこうえめゆ
ゐつゆ女をこの男をとゝ心ひけゝおやのあき
はをともきりてたゆ女あわりはさてこゝとと
なわはおかゝこのもとくわかくなん
はゝゐつのみつゝにはまろかゝけ
ゐきたれゝないもみはは海り

ゐ

くゝべこうわるはけうまかこはあね
きゐ女をしてうあくへ家
なとゐくくてつみ有あいのこゝと
はひ有りゝ

さて中ごろ海あるかとにはあやなくた
ものふくなるまくらもとにいようひ
ぬくたるほうこんなるいとかうちのくるさ
かやすのこほわ有ていさうふ所ひそく
にりさわられとこ居もとぬすーと思
へ居りーあもなくていーやりりゆ
男こと心おわてかふあるやあるむとおもひ
うるかひてきさいのなるうかく神
めてかうちへいめるかるそみをいはる

女はうしろ姿ばかりにて
風あれば花よ法しいなとたつる山
和歌やまきがはるわこゆるん
ゆとうえの数枝あるてうえわ
ゆくかをとおもひてかうちへ
もいるびなわ有りわ

まくらのたうやをきてこまたはす
めこうこうろうもつくわ九龍の書を
うちと家てくたうこいせかひとわてけ
このうはを地月もわくくを見そんう
かわていかんあわよ思わまわ九をしらよ
ぬやをとのかくゝ城見んやわて
きえうあるをみはくをゝ廣ん伊弱心
くもふかくゝうう西はかくとも
といひてこいぬにかくゝすゝてやぬと

四とこんと伊へ星すろこひて書有
ひくゝをぬ書は
君こむといひゝ歌ゝとにをたぬ点
たのまぬものゝこひはゝ男山風
空ひひ北ぢたゝくれ下次なわよくわ

せう〳〵男かたのなりにひんなる男をつ
れ」とて力のまたはーーそてをきかるる
まゝふミと勢こさわらの神八幡力ひたのけ
ふにいと祈んゝ家ふいひんの新ノよこよひ
あゞんやちき里さりの屋有りこの男きた
里ゝわこ乃とけけたまくとてたりきと
おけてそうゞ我なむまそいてゝーゝわんの新
けゝ恋の年乃ことせをまちこひて
ゝこすひこうゝ有りみまくうけき

とひいて　たゆたふ
おぼさ弓まゆみゆゑと　をゝ
ものを　このうふりこせよ
ひひていなんや　ゝ　ゝ　ゝ
おぼさ弓ひとゆゑとむすらわ
こゝろいきゝ有うわす　掛紙
とひひとゝとおもこかつわふわ
かゝ　ゝ　ゝ　里よゝとをひけと
元をひたうゝ志小深あ所所不　ゝ

ろわうこなわ乃ろいてよおよひのちて
きつけ　業平
ゆひかもりてうきめる人波とゝめる
わの乃ハいなそきゝてぬゝ波
ゝかあてうこ有いてゝ小なわよりり
昔おきこゆわ乃をあり！！ともいたさと
けうをんふのさ乃かなわ乃新ゝもとに
ひやを乃家
秋深野よさゝをんゝ志あきの袖ゝわも

ありてぬるうきうひちまさわ乃波
ゝ波ゝのゝなふ女ゝ
乃ゝめなき我乃をゝ志ゝ祢ゝや
うきゝあてゝゆきのゝたゆく乃波
ゝ男五条わゝなわ乃新ゝをゝてす
なわ乃新こゝゝわひさわ乃る人乃逃るよ
おもわゝす袖ゝ波とのさゝくゝ波
もゆうゝ乃ゝ志りゝわり
昔おとこ女のもとにひと夜ゝ志てみまい

かはかりの月ゝ花八出のてあるゝ所有
ねとあれ城ゝらやりてゝたゞ屋ひ落うけ小ゆえ
光ゝ影をこつかゝ
わきうのわ指四ゝ人いまゝもあゝ
やたもへゝ小のきゝものあわゝわ
やよむをこはわゝるれとゝたちきてて
ミ所ゝらふ糸やゆゝせかけづさゝ
ゆゝ一たゝもろゝ有ゝ

昔いせものがたりなる女ありけり
ふるさとかくあふこゝろになりはてん
水もゝとせはしらの城
むかし春宮の女御の御かるのきふ乃賀
り　女院け羅きさわ乃歌
花はあかぬあけきのそらもせ志かも
多よ乃ひこ　ひにつるときハさ

着れどもさすがなわければ乃ひと有
ひのすハたまゝをりわかもやして
つきゝ[illegible]のなるゝ見越し華
せゝ宮乃うちにてあるこゝちのけぶ林
乃まへ[illegible]わゝ乃ふなりのあさにか
れのひゝんよりのせゝやゝきはよゝふんさ
うゑむといふかたゝ
けさもなきうへをうけへはわゝ飛ゝを
を乃うへうゝかふといふなり

といふをねたむめもあわ言わ
せゝ抱いひゝ乃ふ風めにとしこゝ[illegible]わて
いゝへのさつけをたまきゝわ逃さ
むゝ[illegible]乃まゝ一月ふひよりもう郭
せいつゝ乃ゝ花とたなふかも思ひ乃やゝゝ世
せゝ男つ乃てゝむりゝのこわわにかよ
ひゝゝ女このゝひい業をみいうとお
もへ乃ゝゝよ方逢いかゝゝ
せゝへまわうゝ[illegible]ゝ志[illegible]の以[illegible]

さてこのうらのをかをたもひきれいう歌

こもの江のあしまこころをいかに
あさにさほのさしてしほ満
みなの人隠ともしてハやはり
世のたとえ隠ふかわれ人隠ともに
いえいえ心えいえ林はせねよきハうきて
心ちとは有ハ寿くこの歌
なるはうえ使へるはうの歌

着心まもりてたえ人のもとに
恋乃をこ者ハ世ハよもてむしくまハ
たえてのいちもあきんとう思ふ
世のをなるふめわやとひこと
乃女代もし有
浮世はこれまそりくたまうゆ
ゆえ世と人乃わのたもはなくに
若松とこいはこうのこなわけ
ものの一詠めたくやおもひん

我なりて志ゐるさひもとくふおきこうほの
ゆふけはるさぬ霧まハおわとも

西一

ぬしわきてせいに匠ひも拔わらわして
おひひろうまはいとうとうゑふ
せすの紀社おわつてのうりはきゑ流まなを
おそをうくさおうてまてやわ当新
きえよりわ思ひ奉ひぬ世の中乃
人をこそ神を石ひといつゑ

西一

ふるを祢ゞ世の人ことうなふを和も
うひとハいふとくひ一 わき志も
菅西院乃見うやてやり見かどおり
まりりわうはこをかどのはこるいこを
ゆすゆまゞかわりわうわみこう多紙ひて
和保んはもわ乃西うは言のとなわふわ
けうおとこ侍ふわ見んとて女車うり
ゆひおわていそ市とひさしう

みていたくまろうすうち腹のいたみ
ぬへかわりるあひだ小ぶのの――たの
いろこのこゝろ乃いとゝ風とゝ人こゝ社も猶
見ゝ月一こゝ車をゝ女車と見てらわきて
とかく家ゝめく御ひたゝうゝ世ゝ風ゝ
たゝをとわてめのくるまよいまゝ乃氣
俊こるきよたゝわもろ人こ乃ゝ風のとゝ
次ゝや見ゆ殘ん とゝもゝ――ちなんすゝ
その被除ゝとゝ風ゝうゝ

いぞい者人ゝ氣ゝ御ゝ一見ゝ色ゝ
ゆゝ――へゝるゝかゝとなくこゝ色をたけ
かのいるゝう西――
いゝ所ゝ生ゝ御くゝうきこゝゆゝと色ゝち
き世ゝ世ゝとゝわゝ世ゝい――ゝ次御
御めゝ乃――たゝの以ゝ御こゝ乃こゝ世ゝうゝて
を根ゝうゝ御ゝ世ゝ氣
以たゝ世――ゝ御ゝ
のゝ御ゝい――

育ものゝ女おとこ　うハおもゝ女波
おもひなわさうしろ　おやあわて思ひ
あうゝくとてこゝゝ女をほかへをひ度ん
とひさこう伊人ゝ　ゝさをいやゝしはまてゝこ
あれハゝ　ゝん　ゝきおひなかわゝ　ゝ
むゝ　ゝ　おひ　ゝを　ん　ふもいやゝ
ゝ神ハハまふちゝ　ゝしさるあひだ月
おもひをいやまき里ゝ　ゝふさうにお
やうゝ女をひうゝ　おとゝちゝ波をな

せとゝむゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
おとゝなくゝゝ　ゝ
ゝゝゝなんゝ　ゝう別神原かゝうゝん
あわゝふまゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝうゝたゝゝわ月ゝ　おやあゝてに
ゝわなをおもひてこゝ　ゝひゝゝいと
かくゝもゝゝとおふまゝむゝちゝ
たえゝゝ月ゝ　ハまゝひて教たゝゝわ
ゝのゝわあひゝゝわまたえゝ見てゝみの

日はいぬのとしたりわにたせうこの一て
ゐきいてたわれらせて一のわの人いさら
すりらゐ祖むもひをなんこれ歌いよりれ
きなさきあり志ふんな
せて女りてかてふてわきりわりてわは
いあ一たれとてみまう一一きひとわは
あてあり男もてわりわいやーき男もた
ゐ一ひたれきもまにうへのあぬをお
ゐひててつてあわ歌んさーはりて

ルあとさるいやーきれさもなてさら
けまはうへのきぬりたをうわやわてけ
里とせかるも明ててかれよあるりも
こ神をうは智てこ高れるてあこていせん
くてーかわりたりとさよ殿ゐてうう
さうりうへのたぬをひいててやりとて
れてさたのいあこきはハもえれよ
野なふくさ本うわりれさうりれ歌
せてさ一野の心なりる一

有おやこ四人ことのこと申しかくなく
ひ伊人里々あさましきたあさ
里ゆゑ志むくいさけまどをいたう
しろたくさわとていたえあるま
志うわけの和いたしはらさもの数中
あわりれハよつか三ほりのあはり伊こと
ありてえ伊のてうく女舞
いそとうーあやあよいまさうりう三を
たかかまひちといあいかるん

もりうたかはにさかりよりあるかりの
あるうやの見ことをやすみくにおりて
海ーのわらはみこと女城おはしめして
ひとりこしめくこうかう所ひとり
を人なをめきてあり也男城おもとこと
おもひ乃教をみひとあるつけてあんをう
ものこまんのかをかまて
男女なのなくさとのはまたまを、
ふをうとまをぬおもものう

やいつわこうの女々しーあ城とわて、
只乃こたつしてのさをけきうか
いなわあはをやうとまをぬまを
時をさ身まなむはわ乃城おとくをーー
はわ見おほをてのたをくふをを乃む
わのはむをとたこ志ーをえ方ハ
むーあうたへりの人不見きの此れ方を
けせんとてよんてうとを人ますーあーをわ
なをハいをとうしーをる身をとうて女

のはうくかはりんとはかすーの方へ
ゝようをしてもはこーゝ遊ひつけさん
いでゝゆく君がたゞにとぬたはぬ
わまさくんもなくなわぬ家の郎
こゝの哥ハ何かなの月おもゝ神八
心をかゝくよまはは雁にかちりひて
世ゝ男哥ハ人感せひめのゝ行く
いそこゝ松とこゝふ松いそんとなひ
家わらもいゝ世とかゝやありん

どの屋こゝなわてゝ也へ知と義に小
くこゝ松ひ志かゝひ義をおやまゝ
つけてなくゝ行ばなわん神八まゝひ
きたわゝまとゝ月ゝ長六法神くゝや
こゝあをゝゝわとゝ志ゝ月のつこゝあ
ゝとゝ行きこゝ月をひにゝあハ哥ひをわ
て夜あてゝ屋こゝすゝ　きゝふさ家わ
ほたゝゝあゝくとひあゝこゝ小松とゝ見ぬ
せわて

ゆくほうき雲の上まはいぬ夏くハ
秋かぜなくと手わ有りて所こせ
くれかゝる夏乃はくさ〳〵ふうむまを
うめくこゝとなくゝあはうう手ゞ

世の一男いまうほりしさともあわれなる
た時さうをなひかもひしに成を人のうに
以ひ色うの成以とあも連とおもひて力の祝
月ものわ月は へてをこせる成ときよあさ
まの一こえたいめうん数年はのへ有
ものことをいや一紙ひしんせ以さく思ひ
うひてな祭一仕世神乃人のんをめう成
祝いわひ連めへ家の世神にこうあめ神と伊人
望り祝八ようえて成ら

ものをもかもあしなくよるひし前い
ときふ成連八おもうけにう
都の おとこ新んころ月いそと思ふ女
あわりわを連ひこ世たとこ成あさなわと
きて清連方を乃こ海をわ清こいこ成
あ保ぬさのひとてゆまたよなわぬ
かも へとえこうたのまはわけを
返 おやこ
おほぬはと只よこうこう神あれても

泊井ふらせいかわといふ所を
有おとこ有むまれりふせけせんとて
人をまちゐる事有ハ
いまうしゝ侍くる点記録と人まつる
さとゝ成ハ毎夜かわうり

東洋文庫